絆・ベルリン

第２回「翼・プロジェクト」報告
（２０１４年7月３０日～8月７日）

日本語での抄訳

Dr. Frank Brose

絆・ベルリン副会長

７月３０日から８月７日まで、津波と大地震に被災した岩手県に住んでいる６人の高校生が 絆・ベルリンの招待で、８日間ベルリンに来ました。この滞在の目的は他の国を知ることと、ドイツ人の若者との交流でした。

私たちは「翼・プロジェクト」 をＮＰＯ・遠野まごころネット（ＴＭＮ）と共同で行いました。３人の引率者も日本から来ました。
ドイツのロベルト・ボッシュ財団から、今年で２回目の「翼・プロジェックト」に１万ユーロ の財政援助をうけました。我々はボッシュ財団に本当に心から感謝しています。そして、後援者は在ドイツ日本国大使館と岩手県教育委員会、それに様々な岩手県のテレビ局と新聞でした。

被災地を離れて、ドイツ社会を体験し、同世代の若者と８日間過ごし、異文化経験をすることによって将来の地域復興・活性化に役立たせてほしいと願いからでした。そして、日独の友好関係を深めることも願っています。

４月の下旬に、遠野市民センターで面接者の２０人から、４人の女子高校生と２人の男子高校生が選ばれました。６月～７月に高校生がＴＭＮの指導で プロジェクトのオリエンテーションを受けました。 岩手県被災地の現状を学ぶと同時に、ドイツ現地でのプレゼンテーションの準備を進めてきました。

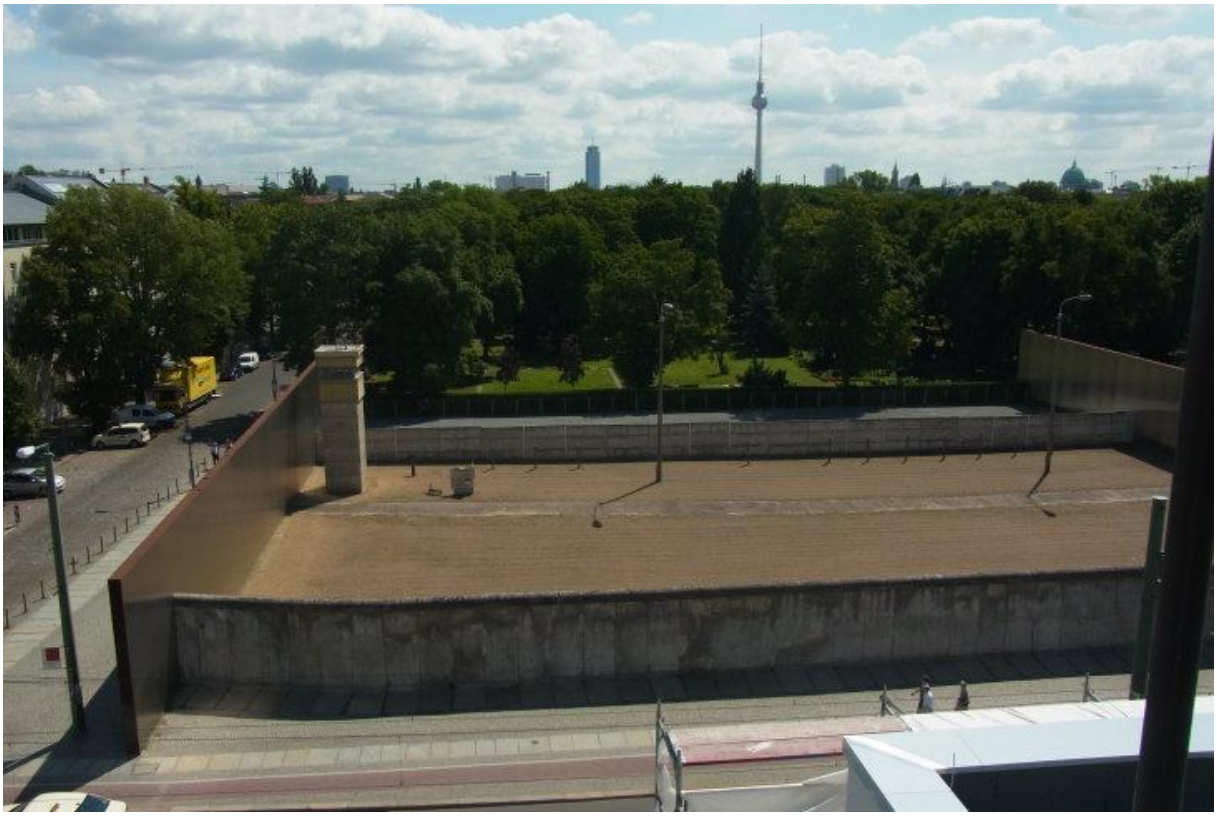
ベルリンでは、高校生はドイツ人家庭でホームステイしました。そして、２泊３日のワークキャンプがありました。

７月３１日は一日中、ベルリン・市内史跡観光をしました。 ブランデンブルク門から都心を歩き回りました。

まず、ホロコースト記念碑を観光しました。

そして、「Global Stone Projekt　（グローバル・ストーン・プロジェクト）」も観光しました。ストーン・プロジェクトの５つの石は「平和」に不可欠な５つのステップの象徴です。

昼に、ベルリン・壁記念館の案内　(Gedenkstätte Berliner Mauer)にいきました。



午後、高校生は、市内史跡観光を続けました。たとえば、ベルリン・ドームへ行きました。

私はＴＭＮの理事長と一緒に「ＵＳＥ」障害者のための工場を訪問しました。大槌では新しい障害者のための工場も建てられましたので、将来における協力の可能性について話しました。

８月１日に、ドイツ森林保護団体青年部の自然保護塔の前に植樹運動をしました。日本とドイツの友好を深めるために、リンゴの木と桜の木を植えました。次の日、その植樹運動についての記事が二つ新聞に出ました。

自然保護塔はベルリンの旧壁の道にあります。２５年前に、ベルリンの壁が崩壊しました。

その時から今までに、旧壁地域ではドイツの高校生が平和のシンボルとして、８万の木を植えました。

８月１日の晩から３日の昼まで、ワークキャンプがありました。日本人の高校生とドイツ人の大学生が参加しました。　自己紹介の後で、津波の被災地についてプレゼンテーションと討論が行われました。

８月２日の午後に、歓迎パーティーを庭で行いました。パーティーには出席者が５０名以上いました。細貝萌さんも、来賓の一人でした。

細貝萌さんは、２０１３年からサッカー・ブンデスリーガのヘルタＢＳＣでプレーしています。

満座の中で高校生はもう一度岩手県被災地の現状についてのプレゼンテーションをしました。

８月３日の昼に、ホストファミリーは高校生を迎えに来ました。午後はホストファミリーと一緒に自由行動をとりました。妻と私は日本人の引率者と一緒にシュプレー川へ船遊びに行きました。

８月４日に、私たちは「ベルリン・ターフェル（食べ物配布 NPO）」を訪問しました。日本人の高校生はベルリン・ターフェルで２、３時間ボランティア活動をしました。
その後で、パワーポイント・プレゼンテーションを見て、食べ物の浪費について論じました。

テー ブルを意味する「ベルリン・ターフェル」の基本理念は、余った食材を廃棄する代わりにホームレスの人達と貧しい人達に分配できないだろうかという発想に基 づいています。 スーパーなどにある賞味期限が迫った食料品や前日に売れ残ったパンや市場で売れ残った果物や野菜、さらにはお祭りやバイキングで残った料理などがその対象です。こういった食材をボランティアが引き取りに行き、社会福祉施設に届け、そこで調理して分配するという訳です。
ホームレス支援機関も、一般の社 会援助機関も「ターフェル」か ら食材の供給を受けています。そして、１ユーロという名目上の価格で袋に入った食料品をいろいろなところ（教会など）に配布しています。

８月４日の午後に、高校生が学校の制服を着て、日本大使館を訪問しました。大使の挨拶の後で、高校生はプレゼンテーションをしました。パワーポイント・プレゼンテーションの後で、草稿を離れて被災地の復興についての自分自身の見解を述べました。

８月５日に、ドレスデンに行きました。まず、ドレスデン市内史跡を観光しました。

聖母教会（Ｆｒａｕｅｎｋｉｒｃｈｅ）を例にとって、ドレスデンの復興について詳しく述べました。聖母教会の復興には、ドレスデンの市民運動が大きな役割を果たしました。

右の写真は１９４５年（終戦）です。

上の写真は２０１４年(２００２年～２００５年再建しました)

そして、Pillnitz 城とエルベ砂岩山地（Bastei）を訪問しました。

８月６日に、高校生は「友の会」の案内で博物館島（Museumsinsel）とドイツ技術博物館 (語: Deutsches Technikmuseum Berlin)を観光しました。
その後、カイザー・ヴィルヘルム記念教会 (Kaiser-Wilhelm-Gedächtnis-kirche)ではヒロシマ原爆の被爆者の記念としてろうそくをつけました。６９年前の今日に、広島はピカドンで焼け野原となりました。

同じ時、妻と私はＴＭＮの理事長と一緒に、まず「Jugendwohnen-im-Kiez（登録協会）」の「Familienzentrum （家族のセンター）」を訪問しました。そして、「ＥＵＲＥＦ（ヨーロッパのエネルギー・フォーラム）」を見学しました。ＥＵＲＥＦは「ヨーロッパのネル ギー・フォーラム」と言う意味です。ＥＵＲＥＦキャンパスでは、将来のモデルとなる小規模なスマートグリッド技術の地区が旧工業用地に建設されました。
その目的は、可能な限り最もカーボンニュートラルな方法でエネルギーを生産し、使用することです。他の目的は、新エネルギーの持つ 「独立のエネルギー源として利用可能」の探求です。
２０１１年末から、このグリッドは太陽熱、風力、熱ポンプ施設をコージェネレーションに接続しました。ＥＵＲＥＦは２０１８年までに、すべての電 力／冷暖房システムのインテリジェント・地域ネットワークを設置し、ほぼカーボンニュートラルな冷房や電力などを生産する予定です。独立の新エネルギー源 は災害地にも大いに役に立つと思います。

ＥＵＲＥＦ地域の中にＩｎｎｏＺという研究センターがあります。そこでは、未来の交通や新エネルギーなどを研究しています。ＩｎｎｏＺでは研究所 の国際部の主任 のレナート氏と面会しました。フロリアン・レナート氏は我々に、移動性について、持続可能な移動性には高度な技術に基づく社会基盤（ス マートインフラ）を組み合わせることが必要だと言いました。

被災地の復興との関連で代替エネルギー資源について、本当に面白い意見の交換をしました。この先も、意見と情報交換を続けていくつもりです。

８月７日に、日本人の高校生がテーゲル空港から日本へ帰りました。

レジュメ

今年は日本人の高校生はドイツの学校の休暇の間にベルリンに来ました。当初は学校が休暇中だと言うことは、不利な点 だと思っていましたが、全く反対でした。

日本人の高校生は学校の授業に参加することはできませんでしたが、ドイツ高校生が全部の翼・プログラムに加わることができました。それで、日本人 とドイツ人がたくさんの活動（植樹運動やドレスデンへの旅行、ベルリン・ターフェルでのボランティアなど）を共同ですることができて、前年度以上に深く知 り合いになることができました。

ベルリンとドレスデンでは古い建物と現代の建物がぎっしりと並んでいます。廃墟の中からよみがえって新しい家々が建られましたが、今でも、戦争の傷が残っています。古いものを保存しながら、それに現在のものを結び合わせているということは、高校生に深い感銘を与えました。

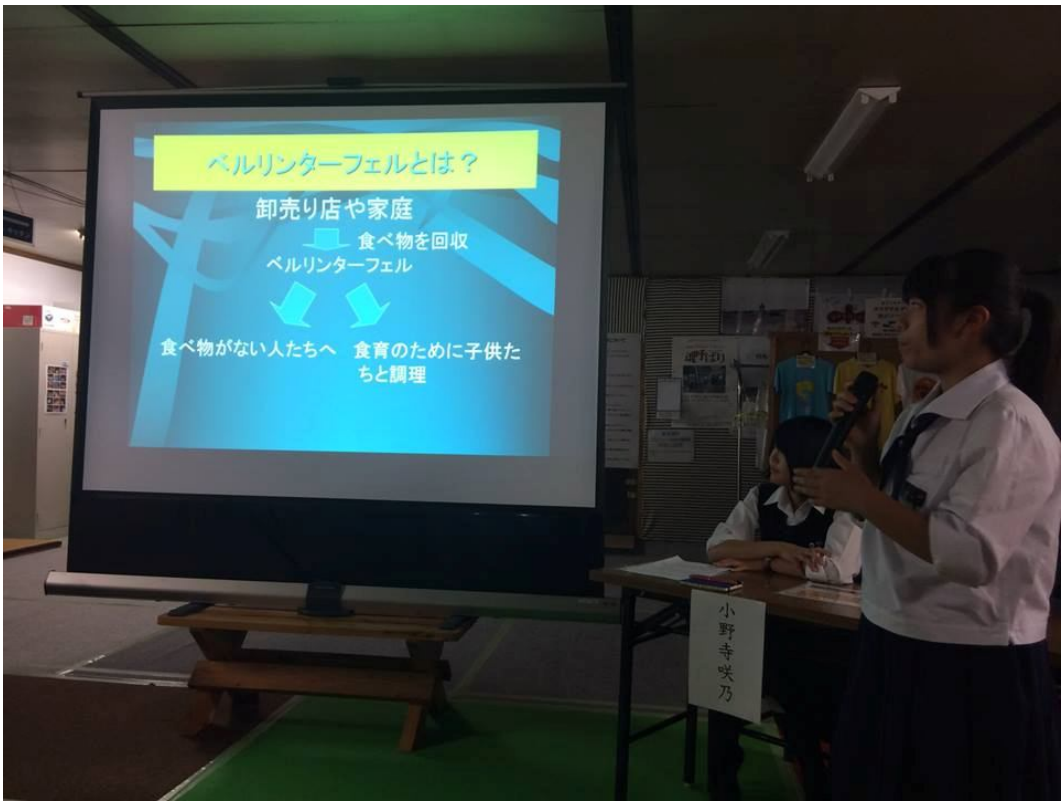
高校生は「過去に起きたことを忘れないが、楽天的に未来を見る」という考えを伝えていくべきだと言いました。
惨害後の復興が長くかかることは、わかっていますが、高校生は東北の復興についての希望を持つことができました。

ドイツ人と日本人の若者あいだで日本の政治についての活発な議論が行われました。とりわけ、原子エネルギーの政治を巡って激論が始まりました。最 初はその問題についてのドイツ人からの多大な関心は日本の高校生にとっては戸惑いでしたが、そのことに関して、彼らの中に、新しい観点が生まれたので、そ の議論は本当に有益だったと思います。

２回目の「翼・プロジェクト」も大成功だったので、絆・ベルリンは来年もプロジェクトのスポンサーシップを続けるつもりです。

後書

９月２３日に、遠野では高校生は帰朝報告会が行われました。６人が東日本大震災被害の英語でのプレゼンテーションを披露し、それぞれの感想を発表しました。



「ドイツ滞在の見聞録」と「日本とドイツの違い」「ドイツの歴史や風習」、「ドイツと日本の教育制度の違い」、」、「ベルリンターフェルから学ん だ事」、「ベルリンから学ぶ日本の復興」について報道しました。　第２次世界大戦や東西統一を経て発展を続けるドイツに「震災復興のヒントがある」と指摘　したと言いました。
「自らの意見を持ち、発信する」「主体的にコミュニケーションを図る重要性」など各自が感じた成果を披露しました。

フランク・ブローゼ

ベルリン、２０１４年9月３０日